

忘れられぬ私の先生方(二)

— 林久重先生のこと —

山崎 匡 輔

赤城嵐の吹き狂う運動場で、今、旗倒しの競技が行われている。小学校の運動会である。

砂塵も子供達も一しよくたになつて揉み合っている。そのうち、一人の子供の頭から、黒血がだらだら流れている。長身瘦形の一人の先生は、それを見るなり駆けよつて、その子の泥頭を舐め、その黒血を吸っているのである。それは、ここに記そうとする林久重先生であり、その子実は私であつたのである。その時は、もちろん私は夢中であつたから、そんなことは少しも気が付いてはいなかつた。ところがそれを見ていた私の父は、すつかり感激してしまつて、あとで私に繰り返し話して聴かせるのであつた。私は、その事を想うと、いつも胸が痛くなるのである。

林先生は附属小学校の訓導であつて、担任の持ち上りの関係で、私は三年ばかりお世話になつたように記憶している。上州富岡に隣接する七日市という、極めて小藩の家老の出であつた。そうして先生と剣道とはつきもののようなものであ

つたから、それで私達も、十一、二歳頃から自然竹刀を持つようになつた。それはとうとう大学生生活迄持ち越しになり、一高時代は選手となつて対外試合にも出るようになったのである。林先生にその端を発したこの剣道修業は、その後、何も本當の刀を使うに役立つことはないけれども、世の中に出てから、色々真剣勝負のような心構えに置かれる度毎に、なんとなく、有形無形の力となつてくれたような気がするのである。林先生の剣道は、その後ますます上達し、筋のいい上品な剣道であつたが、最後に至るまで先生は遂に竹刀を捨てることをしなかつた。晩年には、剣道界で「師範」と称される階級にまでなつていられた。林先生は、いつも、われわれと一緒に教室でお弁当を食べられた。食事が終ると、先生から本を読んで貰つた。もちろん、本は相當に厚い単行本であつたから、お話は毎日、前日の続きになる。これがその頃のわれわれの最大の楽しみの一つであつた。昼食をそこそこすまして、われわれは先生の本読みを、一刻も早く待つという風景が毎日繰り返されたのである。森田思軒の訳した「十五少年」も、その頃読まれた本の一つであつた。この本は、その後古本屋にでも無いかと、気を付けて見ているのであるが、とうとう今に見付け出せない。それは、ニュージランドのオークランド市の小、中学校の生徒十五人が、夏休みを利用して修学旅行することになつて船に乗りこんだのである。ところが、その夜大嵐が起つた。船には十五人の少年以

外には誰もいない。船はたちまちに流され始めた。それは一人の少年のいたずらから艦綱が解かれていたのに原因したものである。嵐は二、三日でおさまったが、来る日も来る日も、東へ東へと船は漂流をつづけた。三、四十日の後、船はある無人島に打ち上げられた。ここで十五少年の無人島生活が始められた。いつも沈着なゴルドン、ことに当つて勇敢なブリアン、何となくずるいコースターなど、それぞれの性格をよく表わした孤島の生活には、あるいは探検に冒険に、食糧獲得に地図作成に、協力相談に喧嘩に仲直りに、子供らしさの興味と好奇との連続であつた。子供らの手に成つた探検地図が黒板に張られ、次ぎ次ぎに話の進捗につれて、地図の上には線や点か書き加えられた。われわれは、クラスの誰はゴルドン、誰はコースターと自他共に許された仇名で呼び合うようになった。話も進んで、ある日遙か沖合を通る船を認め、火を焚いてのろしの代りとし、遂にその船に救われる段になつて、無人島は南米西南端の一島であることが判つた。そこで話は目出度し目出度しで終つた時、われわれは何だか気抜けがしたようになつた。それにつづいて、中江藤樹とか、熊沢蕃山とか云つた具合に、昼食後の林先生の本読みはつづいて、われわれは、それぞれ少年らしい血を沸かした。

それは、ある秋のなかばのことであつた。われわれクラスの数名は七日市の先生のお宅の客となつた。当時、われわれの住んでいた前橋は、それでも幾分か町の態をしていたので

あるが、先生の七日市は鄙びた士族町であつた。柿が真赤な実をたくさん鈴なりにしていた。それは新婚後まもない先生のお宅で、立派なあごひげをしこいて端然と坐られた先生の父君の前で、すつかり痺れを切らしてご馳走になつたことも、今は、楽しい思い出の一つである。翌日は、先生の弟さん達も交え、大挙して妙義山に登つた。秋の紅葉が奇岩怪石を綴り合わせ、あんなに絵のような美しさを満喫したことはない。

また、明日卒業式と云うその前日、われわれは朝三時に起きて赤城に登つた。三月の終りに近いことなので、麓ではつづしや野の花も研を競うと云う陽気であつたが、やがて、山にかかると、そこにはちらちら日陰に残る雪を見るようになったが、箕輪と云う小部落からは、もう膝を溲するような雪路を登らなければならなかつた。林先生は時には先頭に立たれたり、時にはしんがりに廻つたりしていられた。先に行く友を追い越そうとして、一步雪の踏み固められた途からそれると、たちまち身動きもできない程の深い雪の中に身を没するのであつた。赤城の大沼は二尺近い氷に張りつめられ、その表面には五、六寸程の雪氷が、それを覆つていた。われわれは、それを渡つて、湖畔の赤城神社に詣でたのである。湖上の雪氷の表面は、風のためかさなみを立てたような形をして、そのまま凍つているのである。これを神社側の自然の大木の林を通じて眺めると、それが、きらきらと陽光を反射

して、何かしら太古の世界にいるような気がした。神社の囲りは丈余の雪で覆われていた。この遠足は往復十四里、(五十六キロ)相当の強行軍であつたのであるが、われわれにはそれだけ深い印象を残したものであつた。今でも、われわれ小学校の同窓生が時々集るのであるが、この遠足と、十五年とは、林先生の追憶の話の中から省略されることはない。林先生は、われわれが卒業してからも永く前橋に居られ、県の図書館長を勤めていられた。

その後、東京に出られ、逋信大臣前田利定氏(旧七日市藩主)の秘書をなされ、つづいて、逋信博物館長などを歴任された。林先生の東京御在任を幸いとして、われわれ旧友はよく林先生を中心として会合をした。その会に定刻一時間も前に来て待つていられるのは、いつも林先生であつた。その頃は、だいふんとお年をめしていられたが、なお相変らず姿勢が正しく、皆を囲りに坐らせた真中で、居合い抜きなどをされた。こうした小学校の時の集りは、もうわれわれの年頃になると、職業も境遇もまちまちで話が合わないと思われるかも知れないが、事実は全く反対である。集つて来るなり皆その昔の童心にかえり、十五少年の話やら、赤城山遠足の話、その頃のお互の思ひ出、誰ちゃん(男の子)と誰ちゃん(女の子)が随分仲がよかつたとか、なんだかんだと話が仲々尽きないので、いつも最終電車まで席を立つものがない。そうして、その中心はいつも林先生であつたのである。数年前、先

生は前田家のあるお目出たの御用に外出中、にわかに入宿駅のホームで倒れられ、そのまま手当の甲斐もなく他界された。まもなく、われわれの仲間と呼び集められ、老弟子共に囲まれた中で、林先生の御葬儀はいともしめやかに営まれたのであつた。

今日、不思議の御導きによつて、私も教育者の片割れとなつてゐる。そうして、この林久重先生から、何かむずかしいことを習つたと云うことよりも、更に何か全体的のものを与えられてゐるような気がしてならない。私が、ここに記して来た林先生は、読者にとつて極めて平凡なものに見えるに違ひない。そうして、天下の小学校にたくさん林先生、または林先生以上の方々が居られることも私は知つて居る。私はまたそれを感謝する。しかし、林先生を私の「忘れられぬ先生方」から省くことは私にはできないのである。私は、この平凡にも見える林先生を通じて教育者としての責任の重大さを感じる。と同時に、その特権と幸福とをしみじみ感ずるのである。

追記、原稿締切りを一箇月間違えたので、甚だお粗末ではあるが、こんどは、これでお許しを得たい。

(本学学長)